拓跋鮮卑の南下伝説

――北魏の歴史認識――

松下憲一

はじめに

北魏を建国した鮮卑拓跋部の原住地について、『魏書』巻一〇八、礼志一に「魏先の幽都に居るや、石を鑿ちて祖宗の廟を烏洛侯国の西北に為す。自後南遷し、其の地隔遠たり。真君中、烏洛侯国、使を遣わし朝献し、石廟故の如し、民つねに祈請し、神験ありと云う。その歳、中書侍郎李敞を遣わし石室に詣り、天地を告祭し、皇祖先妣を以て配せしむ。……石室は南のかた代京を距ること四千余里ばかり」とあり、また同書巻一〇〇、烏洛侯国伝に「世祖の真君四年来朝し、その国の西北に国家先帝の旧墟あり。石室南北九十歩、東西四十歩、高さ七十尺、室に神霊ありて民多く祈請すと称す。世祖、中書侍郎李敞を遣わし告祭し、祝文を室の壁に刊みて還らしむ」とあることを根拠に、白鳥庫吉は嫩江流域の大興安嶺の一帯と推測した[1]。その後、内田吟風[2]や馬長寿[3]も同様の見解を示したが、宿白は一九六〇年代に黒龍江・遼寧・内蒙古で発見された遺跡を拓跋鮮卑のものとし、『魏書』序紀の記述と合わせて拓跋部の南遷路を提示した[4]。さらに一九八〇年、米文平が大興安嶺北側の嘎仙洞内から太平真君四年の碑文を発見し、嘎仙洞が『魏書』にいう国家先帝の旧墟の石室であるとした[5]。この発見によって嘎仙洞のある大興安嶺北部が拓跋部の原住地、序紀にいう大鮮卑山であるとされ、宿白の南遷路とあわせて現在定説となっている。

しかし嘎仙洞を拓跋部の原住地とする見解に対して異を唱える研究も多数存在し[6]、その多くが烏洛侯国伝の内容を疑問視している。すなわち烏洛侯国はどのようにして石室を北魏の先帝の旧墟であると知ったのかという疑問である。この疑問に対し羅新は、烏洛侯国の報告による嘎仙洞の発見は、拓跋部の起源に対して強固な証拠を提供するものであったために、太武帝によって受け入れられたとし、北魏の北方支配の正統性を強化するものとして、太武帝が進めた拓跋集団の歴史構築の一部分であったことを看破した[7]。

また吉本道雅は『魏書』序紀の構成を詳細に検討し、その結果、序紀は中華の正統性と北族の正統性を示すため多くの古典を引用して創作されたものであることを明らかにした[8]。なお吉本の研究には首肯すべき点が多数あるが、新たに提示された拓跋部の原住地およびそこからの南遷路については疑問が残る。

そこで本稿では、拓跋部の原住地および南下の根拠となっている『魏書』の関連記事（序紀・烏洛侯国伝・礼志）を先行研究に依拠しながら再度検討し、それぞれの記事の書かれた意図や背景、さらには北魏の歴史認識を明らかにしたいと思う。

第一章　『魏書』序紀の検討

序紀については内田吟風をはじめ多くの研究があり、[9]そこでは序紀の内容がどこまで拓跋部の歴史を反映しているのかが問題とされてきたが、序紀のなかで神元帝（拓跋力微）以降の記事については史実を反映したものとして概ね理解されている。

一方、神元帝以前の記事については、道武帝が皇帝に即位したときに創作されたものであるとされる。ただ具体的にどの個所が後世の創作であるかについては見解がわかれる。成帝毛より聖武帝までの君長をすべて架空人物と見なす志田不動麿、実在した部族指導者を反映したものと見なす内田吟風、一部実在した人物が含まれると見なす白鳥庫吉である。ただ内田のように部族指導者の伝説を記録したものとするにしても、序紀では同時に存在した部族指導者を縦の関係にならべることで世系の長さを示そうとしている点、部族指導者を諡号と一字の諱で表記している点、特筆すべき内容がなく即位と死去のみ記されている点ですでに手が加えられている。ただし宣皇帝（推寅）については、諱が他の君長と異なり二字であること、王沈『魏書』に登場する檀石槐の西部大人推演と同名であることから同一人物であり、実在したとされる。献帝推寅と西部大人推演が同一人物か否かについてはのちに検討する。

さて本稿と関連する序紀の記述は神元帝以前である。なかでも大鮮卑山に住んだあと宣皇帝のとき大沢に移動し、さらに聖武皇帝のとき匈奴の故地へ移ったという南遷の記事が拓跋部の伝承にもとづく史実か否か。先行研究において、拓跋部が黄帝の子孫であることについては仮託であるとされるが、大鮮卑山に住んだとする箇所については疑問を挟む研究者はほとんどいない。それは拓跋部が鮮卑であるという前提によるものだと思われるが、しかし吉本は序紀の記述について典拠を詳細に検討し、序紀の該当部分はほとんどが道武帝期以降の創作であることを明らかにしている。ただし一部分に拓跋部の伝承が反映されており、そこから吉本は新たな南遷路を提示している。

そこで吉本の研究によりつつ序紀の記事の典拠を再度確認し、序紀の該当箇所が古典を利用した創作であることを明らかにしたうえで、吉本の提示する南遷路の妥当性について検討する。なお分析にあたって序紀の該当部分を二つにわける。

第一部

①昔黄帝有子二十五人、②或内列諸華、或外分荒服、③昌意少子、受封北土、④国有大鮮卑山、因以為号。⑤其後、世為君長、⑥統幽都之北、⑦広漠之野、畜牧遷徙、射猟為業、淳樸為俗、簡易為化、不為文字、刻木紀契而已、世事遠近、人相伝授、如史官之紀録焉。⑧黄帝以土徳王、北俗謂土為託、謂后為跋、故以為氏。⑨其裔始均、入仕堯世、逐女魃於、弱水之北、民頼其勤、帝舜嘉之、命為田祖。⑩爰歴三代、以及秦漢、獯鬻・猃狁・山戎・匈奴之属、累代残暴、作害中州、而始均之裔、不交南夏、是以載籍無聞焉。

序紀の冒頭①「昔黄帝有子二十五人」は『国語』晋語四「黄帝之子二十五人」、『史記』五帝本紀「黄帝二十五子」による。②「或内列諸華、或外分荒服」は『史記』秦本紀「秦之先、帝顓頊之苗裔孫……子孫或在

中国、或在夷狄」から黄帝の子孫に夷狄に住んだものがいることを応用したと思われる。③「昌意少子、受封北土」の昌意は黄帝の第二子で『史記』五帝本紀に「其二曰昌意、降居若水。昌意娶蜀山氏女」とあるが、昌意は若水に住んでいる。昌意が蜀山氏の女を娶っていることからわかるように若水は蜀（四川）の河川であり、昌意の少子が北土に封じられたとする部分と合わない。しかし『今本竹書紀年』巻上には「昌意降居弱水」と昌意が弱水に住んだとある。弱水は『三国志』巻三〇、夫余伝に「夫余在長城之北、去玄菟千里、南与高句麗、東与挹婁、西与鮮卑接、北有弱水、方可二千里」とあるように夫余の北の河川であり北土と適合する。よって『今本竹書紀年』の記事を採用したと思われる。この点については吉本の南遷路と関係するのでのちに詳述する。

④「国有大鮮卑山、因以為号」は王沈『魏書』の「鮮卑亦東胡之余也、別保鮮卑山、因号焉」によることは明らかである。なお大鮮卑山とすることについて、吉本は拓跋に先行する鮮卑諸部との差別化を図ったとするが妥当な見解である。⑤「其後、世為君長」は王沈『魏書』に檀石槐の死後に大人の世襲制がはじまったとする点と矛盾するが、拓跋部における君長の世襲性の永続を示すための操作と吉本は指摘する。⑥「統幽都之北」は『史記』五帝本紀に「居北方、曰幽都」とあり、幽都は北方を表し、幽都の北はさらなる北方の地を指す。⑦「広漠之野、畜牧遷徙、射猟為業、淳樸為俗、簡易為化、不為文字、刻木紀契而已、世事遠近、人相伝授、如史官之紀録焉」は『史記』匈奴列伝「唐虞以上有山戎・獫狁・葷粥、居于北蛮、随畜而転移。……逐水草遷徙、……毋文書、以言語為約束。……其俗、寛則随畜、因射猟禽獣為生業」と王沈『魏書』烏丸伝の「刻木為信、邑落伝行、無文字」をもとにしている。ただ後半の「世事遠近、人相伝授、如史官之紀録焉」については拓跋部の歴史をうたった「真人代歌」を指すと思われる。

⑧「黄帝以土徳王、北俗謂土為託、謂后為跋、故以為氏」は『史記』五帝本紀に「有土徳之瑞、故号黄帝」をもとに拓跋氏の由来を仮託したものである。なお羅新によれば拓跋は古代トルコ語で土地の主人を意味する官職名が部族名になったものであり[10]、土徳王という意味は仮託ではあるが、托が土で跋が后（きみ）という説明は土地の主人という意味と合致している。

⑨「其裔始均、入仕堯世、逐女魃於弱水之北、民頼其勤、帝舜嘉之、命為田祖」について、まず始均は『山海経』大荒西経に「有北狄之国、黄帝之孫曰始均。始均生北狄」とあり、北狄の始祖として登場する。ただしここでは黄帝の孫となっている。始均が女魃を弱水の北に追放したことは『山海経』大荒北経「黄帝乃下天女曰魃、雨止、遂殺蚩尤、魃不得復上、所居不雨、叔均言之帝、後置之赤水之北、叔均乃為田祖」にもとづくが、ここでは始均ではなく叔均となっている。黄帝の孫である始均を序紀では黄帝の末裔として堯に仕えた人物とし、黄帝に仕えて女魃を追放して田祖となった叔均の事績を堯に仕えた始均の業績へと改編している。さらに重要な改編は『山海経』では赤水の北とあるのを序紀では弱水の北としている点である。吉本は弱水が拓跋の実際の記憶において不可欠の存在であったためにわざわざ改編したとする。しかし筆者は、赤水は北方の河川としてふさわしくないことから、北方の河川である弱水に改めたとする園田の見解に賛同する[11]。

⑩「爰歴三代、以及秦漢、獯鬻、獫狁、山戎、匈奴之属、累代残暴、作害中州、而始均之裔、不交南夏、是以載籍無聞焉」は『史記』匈奴列

伝「唐虞以上有山戎・獫狁・葷粥、居于北蛮、随畜而転移」によりつつ、夏殷周の三代から秦漢まで拓跋部が中華と交流を持たなかったために史書に記述がないとしている。

以上、序紀の第一部は黄帝の孫にあたる昌意の少子が大鮮卑山に住んで拓跋部の祖先となったこと、子孫の始均が堯に仕えて女魃を弱水の北に追放し田祖（土地神）となったこと。その後、秦漢まで中華世界と交流を持たず事績が史書に見えないことを描いている。

第二部

⑪積六十七世、至成皇帝諱毛立。聡明武略、遠近所推、統国三十六、大姓九十九、威振北方、莫不率服、崩。

節皇帝諱貸立、崩。

荘皇帝諱観立、崩。

明皇帝諱楼立、崩。

安皇帝諱越立、崩。

⑫宣皇帝諱推寅立。南遷大沢、方千余里、厥土昏冥沮洳。謀更南徙、未行而崩。

景皇帝諱利立、崩。

元皇帝諱俟立、崩。

和皇帝諱肆立、崩。

定皇帝諱机立、崩。

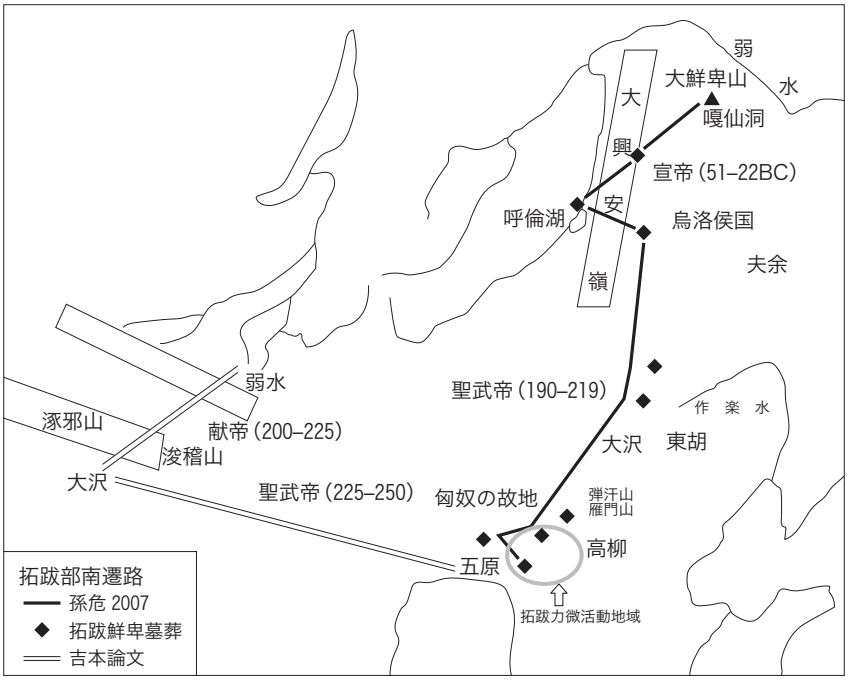
僖皇帝諱蓋立、崩。

威皇帝諱儈立、崩。

献皇帝諱隣立。時有神人言於国曰、此土荒遐、未足以建都邑、宜復徙居。帝時年衰老、乃以位授子。

聖武皇帝諱詰汾。献帝命南移、山谷高深、九難八阻、於是欲止。⑬有神獣、其形似馬、其声類牛、先行導引、暦年乃出。⑭始居匈奴之故地。其遷徙策略、多出宣・献二帝、故人併号曰推寅、蓋俗云鑽研之義。⑮初、聖武帝嘗率数万騎田於山沢、欻見輜軿自天而下。既至、見美婦人、侍衛甚盛。帝異而問之、対曰、我天女也。受命相偶。遂同寝宿。旦、請還曰、明年周時、復会此処。言終而別、去如風雨。及期、帝至先所田処、果復相見。天女以所生男授帝曰、此君之子也。善養視之。子孫相承、当世為帝王。語訖而去。子即始祖也。故時人諺曰、詰汾皇帝無婦家、力微皇帝無舅家。帝崩。

まず⑪「積六十七世」で成帝が即位し、北方の三十六国・九十九姓を統べたとあるが、吉本が明らかにしたように[12]、成帝の在位は前二〇一年～前一七二年にあたり、漢の高祖と匈奴の冒頓単于の時代と重なり、拓跋部の漢・匈奴との対等性が示される。その後、節帝・荘帝・明帝・安帝の即位と崩御が記され、⑫宣帝が登場する。宣帝の在位は前五一年～前二二年、匈奴の呼韓邪単于が前漢に入朝した甘露三年（前五一）にあたり、拓跋部が匈奴にかわって北族の覇者となったことを示す。宣帝が移った大沢は、『山海経』巻一一、海内西経に「大沢方百里、群鳥所生及所解。在雁門北。雁門山、雁出其間、在高柳北。高柳在代北。……東胡在大沢東」とあり、また『山海経』巻一七、大荒北経に「有大沢方千里、群鳥所解」とあるものに依拠したと思われる。『山海経』海内西経から大沢の位置を示すと、大沢は雁門の北にあり、雁門は高柳の北、高柳は代の北となり、さらに大沢の東に東胡がいたことになる（地図参照）。



魏書序紀考証（吉本）　松下加筆

その後、景帝・元帝・和帝・定帝・僖帝・威帝の即位と崩御が記され、献帝が登場する。献帝の在位は一六〇～一八九年となるが、吉本は宣帝と献帝が同じく「推寅」を号し、宣帝が南遷し、献帝が南遷を企図したという序紀の記述は、宣帝が献帝の分身であることを意味し、さらに献帝は王沈『魏書』の檀石槐の西部大人推演のことであるとする。しかし献帝が西部大人推演であるならば、なぜ献帝の諱が隣で推演ではないのか。序紀には「其遷徙策略、多出宣・献二帝、故人併号曰推寅、蓋俗云鑽研之義」とあり、拓跋部の南遷を指導した宣帝と献帝をともに鮮卑語で研鑽を意味する「推寅」と号したとしており、南遷の正しさを示すエピソードとして記述すると同時に、西部大人推演とつなげようとしていると思われる。献帝を西部大人推演と明記していないことが、かえって献帝が推演ではないことを意味すると筆者は考える。

献帝は南遷を企図したが年老いていたために息子の聖武帝に委ねた。聖武帝は神獣の助けを得て、ついに匈奴の故地にたどり着いた。神獣は形が馬に似て、声が牛に類するとあり、佐藤賢はこの動物が家畜トナカイであり、聖武帝の南遷はトナカイが生息するシベリアから大興安嶺の北部への移住を雛形として、宣帝と聖武帝の南遷へ転用されたとするが[13]、神獣を実在の動物とする必要はない。『魏書』巻一〇八の一、礼志一に「国家継黄帝之後、宜為土徳、故神獣如牛、牛土畜、又黄星顕曜、其符也」とあり、神獣は土徳の聖獣である牛の如しとある。一方で聖武帝を導いた神獣は形が馬に似ているとあるが、これは北方民族の聖なる獣である馬を意味している。すなわち神獣とは北方民族の聖獣と土徳の聖獣が組合わされた想像の動物と考えた方がよい[14]。

聖武帝が至った匈奴の故地について、王沈『魏書』に、

檀石槐既立、乃為庭於高柳北三百余里弾汗山啜仇水上、東西部大人皆帰焉。兵馬甚盛、南鈔漢辺、北拒丁令、東卻夫余、西擊烏孫、尽拠匈奴故地、……乃分其地為中東西三部。従右北平以東至遼、遼東接夫余、濊貊為東部、二十余邑、其大人曰弥加、闕機、素利、槐頭。従右北平以西至上谷為中部、十余邑、其大人曰柯最、闕居、慕容等、為大帥。従上谷以西至燉煌、西接烏孫為西部、二十余邑、其大人曰置鞬、落羅、日律、推演、宴荔游等、皆為大帥、而制属檀石槐。

とあり、檀石槐が匈奴の故地を支配したことが述べられる。その範囲は、南は漢、北は丁令、東は夫余、西は烏孫とある。また檀石槐は王庭を高柳の北三百里の弾汗山・啜仇水のほとりに置き、領域を三部に分けた。東部は右北平から遼東まで二十余邑あり、弥加・闕機・素利・槐頭の大人が率いた。中部は右北平より上谷までの十余邑、柯最・闕居・慕容等の大人が率いた。西部は上谷から敦煌まで二十余邑、置鞬・落羅・日律・推演・宴荔游等の大人が率いた。

檀石槐の鮮卑国家は夫余と接していた。その夫余の北を弱水が流れていたことは『三国志』夫余伝に「夫余在長城之北、去玄菟千里、南与高句麗、東与挹婁、西与鮮卑接、北有弱水、方可二千里」とあることからわかる。また檀石槐の王庭が高柳の北に置かれていたことは、『山海経』海内西経の大沢の位置関係と適合する。そして聖武帝が匈奴の故地に出たことは、檀石槐の鮮卑国家に参加したことを意味し、西部大人推演ともつながる。

⑮は聖武帝と天女が交わり神元帝が誕生したことを述べる出生譚であるが、これは田村實造が述べるように、神元帝を神格化するための一種の神人交合説話であり、拓跋部の開国伝説に他ならない。[15] 神元帝の廟号が始祖であることは、神元帝が拓跋部の開祖であると認識されていたことを意味する。そしてその認識は拓跋部の歴史を伝える「真人代歌」にもとづくものと思われる。従って、神元帝の出生譚とその即位に関する記事以降が拓跋部本来の歴史伝承（真人代歌）に基づくもので、それ以前の部分は部族伝承とは関係なく、後世に創作された歴史認識であると考えることができよう。

第二部は成帝が匈奴の冒頓単于・漢の高祖と同時期に北方に勢力を拡大したこと。宣帝のときに匈奴の呼韓邪単于の漢入朝により空白となった匈奴の支配地に移動したこと。さらに聖武帝が檀石槐の鮮卑国家に参加して西部大人となったという歴史認識を表している。第一部とあわせると大鮮卑山に住んだ拓跋部が匈奴の南下にあわせて大沢に移動し、さらに匈奴にかわって鮮卑の檀石槐が登場すると、その国家の西部大人として参加したという大鮮卑山→大沢→匈奴故地の西部という南遷が記されていることになる。と同時に、拓跋部が黄帝の子孫であるという中華の正統性と大鮮卑山に拠って北方を支配し、やがて檀石槐の鮮卑国家にも参加したという北方民族の正統性をも主張するものとなっている。

本章の最後に吉本の南遷路を検討しておく。吉本は序紀に記される地名のうち「大沢」と「弱水」は拓跋部の歴史に関連する実在の地名であるとし、その根拠として、二つの地名が序紀に最も近い原資料に基づいて編纂されたと思われる『魏書』に実在の地名として登場し、かつ「大沢」と「弱水」が同じ方面に見えることをあげる。

吉本が根拠とした史料は『魏書』崔浩伝と蠕蠕伝である。二つの記事は太武帝期の柔然遠征に関するものであるが、崔浩伝は神䴥二年（四二

九）に太武帝が弱水に沿って西行し、涿邪山に至ったという内容である。一方、蠕蠕伝は太延四年（四三八）に太武帝が浚稽山に至って部隊を二つに分け、陳留王崇は大沢から涿邪山に向かい、太武帝は浚稽山から天山へ向かったという内容で、二つの記事を総合すると、弱水に沿って西に向かったところに涿邪山があり、涿邪山の周辺に大沢が存在することになる（地図参照）。よって拓跋部の南遷とは、外蒙古の「弱水」流域（トーラ河）から涿邪山付近の「大沢」に移動し、さらに匈奴の故地にあたる五原郡塞外に至るルートを指すと吉本は考えている。

これに対して筆者は、まず弱水について、『山海経』大荒北経の「赤水」を「弱水」に改めたのは、拓跋部の実際の記録にあったからではなく、北方の河川とするためであり、かつ『三国志』夫余伝に従えば弱水は鮮卑がいた遼東塞外の河川となり、序紀の世界観と適合する。

大沢についても『山海経』海内西経の大沢の位置に従うことで、檀石槐の鮮卑国家の領域とも適合する。檀石槐が王庭を置いた高柳の北に大沢が位置し、大鮮卑山から南下して匈奴の故地に出るまでの南遷路にあたるのである。さらに『魏書』には大沢が八個所出てくる（うち一つは序紀）が[16]、『魏書』に登場する大沢は各地に存在する湖沼を指し、吉本が指摘する大沢もそうしたなかの一つに過ぎず、特定の場所を示す地名ではない。従って序紀のなかに弱水と大沢があるからと言って、それが拓跋部の実際の記憶にある地名であるとすることはできないのである。

第二章　序紀の史料源

前章で検討した序紀の史料源はなにか。序紀の史料源とされるものに「真人代歌」と鄧淵『代記』がある。まず「真人代歌」について、『魏書』巻一〇九、楽志には、

凡楽者楽其所自生、礼不忘其本、掖庭中歌真人代歌、上叙祖宗開基所由、下及君臣廃興之跡、凡一百五十章、昏晨歌之、時与絲竹合奏。郊廟宴饗亦用之。

とあり、「真人代歌」は祖宗の開基の由来、君臣興廃の跡を一五〇章にまとめたもので、後宮において朝夕歌われ、郊廟における祭祀や饗宴でも歌われた。さらに『旧唐書』巻二九、音楽志には、

北狄楽、其可知者鮮卑・吐谷渾・部落稽三国、皆馬上楽也。鼓吹本軍旅之音、馬上奏之、故自漢以来、北狄楽総帰鼓吹署。後魏楽府始有北歌、即魏史所謂真人代歌是也。代都時、命掖庭宮女晨夕歌之。周隋世、与西涼楽雑奏。今存者五十三章、其名目可解者六章。慕容可汗・吐谷渾・部落稽・鉅鹿公主・白浄王太子・企喩也。其不可解者、咸多可汗之辞。按今大角、此即後魏世所謂簸邏迴者是也。其曲亦多可汗之辞。北虜之俗、呼主為可汗。吐谷渾又慕容別種、知此歌是燕魏之際鮮卑歌、歌辞虜音、竟不可暁。

とあり、「真人代歌」はもともと馬上で演奏される軍楽の一つとして、唐では北狄楽に分類される。一五〇章のうち唐にまでに残存したのは五三章で、そのうち題名がわかるものが六章で、その他については可汗という語句が多く見られることから、慕容燕や北魏のときの鮮卑語の歌で、歌詞も鮮卑語であるので意味は分からないとする[17]。

「真人代歌」について田余慶は、道武帝の意図的な選別、部分的改編を受けた「燕魏の際の鮮卑歌」であったとする。「燕魏の際」とは、厳密にいえば、道武帝が天子の旗旌旗を建てた皇始元年（三九六）から、

後燕を平定し平城に定都した天興元年（三九八）までを指し、この時期に鄧淵が「真人代歌」の収集を行った。道武帝は拓跋部の伝説および鮮卑各部に共通して存続する伝説を用いて先人の功績を頌える歌謡として編成し、それを代人に広めることで帝業のための世論を作り出したという。[18]「真人代歌」に代人の連帯感を高める目的があったという田余慶の指摘は重要である。「真人代歌」が作られたのは、道武帝が皇帝に即位した天興元年から六年までであることは『魏書』楽志からわかるが、この時期は皇帝即位にともなう国制の整備が行われ、畿内や郊甸の制定にともなう代人集団の創設が行われた。畿内に居住するものを代人とし連帯性を高める時期に「真人代歌」が作られたのである。「真人代歌」の慕容可汗・吐谷渾・部落稽は君臣興廃の跡にあたり、道武帝による征討を歌ったものであろう。なお「真人代歌」は「祖宗開基所由」を歌っているが、この祖宗開基の由来は黄帝の子孫が大鮮卑山に住んだという伝承ではなく、始祖神元帝力微の出生譚を指すと考えられる。

道武帝の即位について『魏書』巻一〇八の一、礼志一に、

天興元年、定都平城、即皇帝位、立壇兆告祭天地。祝曰、皇帝臣珪敢用玄牡、昭告于皇天后土之霊。上天降命、乃眷我祖宗、世王幽都。珪以不徳、纂戎前緒、思寧黎元、龔行天罰。殪劉顕、屠衛辰、平慕容、定中夏。群下勧進、謂宜正位居尊、以副天人之望。珪以天時人謀、不可久替、謹命礼官、択吉日受皇帝璽綬。惟神祗其丕祚於魏室、永綏四方。事畢、詔有司定行次、正服色。群臣奏以国家継黄帝之後、宜為土徳、故神獣如牛、牛土畜、又黄星顕曜、其符也。於是始従土徳、数用五、服尚黄、犠牲用白。

とあり、即位の祝文には「我が祖宗は世々幽都に王たり」とあり、序紀の「世々君長となりて幽都の北を統ぶ」に類似する表現が見られる。同時に成帝以下の君主とその妃に対して謚を追尊し、[19]崔宏等の上奏に従って黄帝の子孫であることを受けて土徳と定めている。よってこのとき黄帝の子孫であること、土徳であること、祖宗は幽都（北方）の支配者であること、および成帝以降の系譜が作られたことがわかる。

さらに序紀に登場する黄帝の子孫である始均についても鄧淵が編纂した『代記』に書かれていたことが『魏書』巻五七、高祐伝から推測される。[20]それには、

惟聖朝創制上古、開基長発、自始均以後、至成帝、其間世数久遠、是以史弗能伝。臣等疏陋、忝当史職、披覧国記、窃有志焉。

とあり、高祐が閲覧した『国記』は上古からはじまり始均をへて成帝に至る内容が記されていたが、始均から成帝までは世代が長く、史書にも伝わっていないとある。これはまさに序紀の「始均の裔、南夏に交わらず、是を以て載籍聞くなし」を裏付けるものである。鄧淵『代記』の編纂時期は天興五年（四〇二）から天賜四年（四〇七）と考えられるが、『代記』には、黄帝の子孫が大鮮卑山に住んだこと、始均から成帝、さらに道武帝以前のことが編年体で記されていたと考えられる。そして『代記』と「真人代歌」がのち序紀の史料源として利用されたことは田余慶が指摘する通りであるが、[21]『代記』と「真人代歌」の内容と編纂目的は完全に一致するものではない。『代記』は道武帝の皇帝即位の正統性を中華の正統性と鮮卑の正統性の両面から保証するためのものであるのに対し、「真人代歌」は拓跋部の北族支配の正当性を保証する内容として、その起源を黄帝ではなく神元帝に求めた。従って、『代記』は拓跋部本来の部族伝承である「真人代歌」を取り入れつつ、中華の古典を

利用して神元帝以前の歴史を創造したものであり、その『代記』を高祐が『国記』として閲覧し、また魏収が序紀に採用したと考えられる。

さて道武帝期に「真人代歌」および『代記』が編纂され、それが序紀の史料源となったことは確認できたが、この時期の拓跋部の歴史認識形成にあたって、後燕慕容部の歴史認識が影響していることも考えなくてはならない。五胡諸国はそれぞれ国書を編纂していたが、北魏は後燕の中山を征服した際にその図書を入手した。これは北魏が最初に入手した五胡諸国の国書であると思われる。『魏書』巻二、太祖紀、皇始二年（三九七）十月条に「其の伝える所の皇帝璽綬・図書・府庫・珍宝・簿列数万」とあり、後燕の保有する図書を得た。このなかに後燕の国書が含まれているであろうことは、この八ヶ月前にかつて慕容暐に仕えて『燕記』を書いた崔逞が北魏に亡命していることから推定できる。崔逞は清河東武城の人で、三国魏の崔琰の六世孫にあたる。祖父の崔遇と父の瑜は後趙の石虎に仕えた。崔逞は若くして学を好み文才があったが、戦乱にあって父を失い、自ら耕作にあたって生計を立て、前燕の慕容暐のとき著作郎となって『燕記』を著した。その後、苻堅・司馬昌明・翟遼に仕えたのち後燕の慕容垂のもとで秘書監となった。慕容垂の死後、内紛がおこり慕容驎が自立すると崔逞は妻子を連れて北魏に亡命した。亡命当初は優遇され尚書・門下・御史中丞についたが、天興二年（三九九）、東晋の郗恢に宛てた書簡のなかで東晋皇帝の呼称を貶めなかったことから道武帝の怒りを買って死を賜った。[22] また『資治通鑑』によれば、崔逞が戦乱によって家系が絶えることを恐れ、妻の張氏と四人の子供を冀州に残し、その妻子が南燕に奔ったことも死を賜った理由にあげられている。[23]

崔逞とおなじく慕容暐に仕えた封懿も北魏に亡命している。封懿は渤海蓨の人で、父の封放が慕容暐に仕えて吏部尚書になった。封懿は慕容宝に仕えて中書令、民部尚書になったが、慕容宝が道武帝に敗れたのち北魏に亡命した。道武帝はしばしば封懿を引見し、慕容の旧事を問うたが、封懿の応対が怠慢であったため官位を廃され、明元帝になって再び召されて都座大官となり、泰常二年（四一七）に死去した。封懿は『燕書』を著し、頗る世に行われた。[24]

かつて慕容燕に仕えた漢人が北魏に亡命したことにより、彼らを通じて道武帝は慕容部の史書とその歴史認識を入手したと考えられる。そのなかで最も中心的な役割を果たしたのが崔宏である。崔宏は清河東武城の人で、三国魏の崔林の六世孫にあたる。祖父の崔悦は石虎に仕えて司徒左長史となり、父の崔潛は慕容暐に仕えて黄門侍郎となった。崔宏は前秦に仕えたのち後燕の慕容垂のもとで吏部郎、尚書左丞、高陽内史を歴任した。道武帝が常山に攻め入ると崔宏は東へ逃亡したが捕らえられ、道武帝が引見したのち黄門侍郎となり、張袞とともに官爵・朝儀・音楽・律令・国号・五行など国家制度の創設に関わった。道武帝はつねに崔宏を引見して古今の旧事とくに王者の制度・治世の規則について質問し、崔宏は古人の制作した制度・明君や賢臣・過去の王朝の興廃の理由などを述べ、いずれも道武帝の意に適うものであった。[25]

また崔宏とともに中華王朝の制度の導入に関して大きな役割を果たした人物に『代記』の撰者である鄧淵がいる。鄧淵は後燕の平定後に道武帝に仕え、旧事に多識であったことから崔宏と国制創設に参加した。天興元年には「真人代歌」を収集し、さらに道武帝から国記の編纂を命じられ十余巻の『代記』を著したが、この史書は年月に起居行事をならべ

る編年体で書かれた。[26] 先に『代記』が序紀の史料源となったことを述べたが、『代記』の内容は鄧淵個人の歴史認識ではなく、道武帝と旧後燕系の漢人らによって形成された北魏の歴史認識が反映されていると考えて大過ない。

崔宏が関わった五行の土徳決定では、拓跋氏が黄帝の子孫であることを理由にあげているが、拓跋氏が黄帝の子孫であるという認識はすでに代国時代に保持していたことは、晋の光熙元年（三〇六）大邢城の南に建てられた碑文に「魏軒轅之苗裔」（『魏書』巻二三、衛操伝）と刻まれていたことからわかる。碑文が建てられた当時はまだ魏を称していないことから、魏は後世改編された部分であると思われるが、「軒轅之苗裔」については拓跋氏が黄帝の子孫を称した最古の現存文献であると内田は評価している。[27] この碑文は桓帝（拓跋猗㐌）を讃えるために漢人の衛操が製作したものだが、衛操が拓跋氏を黄帝の子孫としたことについて内田は、当時拓跋部に臣属した衛操ら漢人臣僚が蛮族の臣と云われたくない心情よりの発案であろうとする。この推測の是非はともかくとして、漢人の発案によることは疑いない。なおこの時期には黄帝の子孫であることと土徳とを結びつける考えはまだ現れておらず、拓跋氏を土徳としたのは道武帝の皇帝即位のときである。拓跋氏が土徳を主張したのは正統王朝を自認してはじめて意味をもつのであり、西晋の正朔を奉じていたこの段階では存在しない。拓跋土徳説は黄帝後裔説を前提に二次的に形成されたと吉本は述べる。[28]

以上、道武帝の即位時期の歴史認識の形成に旧慕容燕に仕えた漢人が関与したことを述べてきたが、慕容燕の歴史認識との関係はあるのだろうか。そこで以下に慕容燕の歴史認識を見ていくが、慕容燕の歴史認識のうち慕容氏の出自について検討する。

慕容氏の出自に関して以下の三つの史料があげられる。書かれた順に崔鴻『十六国春秋』燕録、魏収『魏書』巻九五、徒何慕容廆伝、『晋書』巻一〇八、慕容廆載記である。

まず崔鴻『十六国春秋』燕録（『太平御覧』巻一二一）には、

慕容廆字弈洛瓌、昌黎棘城鮮卑人

昔高辛氏遊於海浜、留少子厭越以君北夷、世居遼左、号曰東胡。秦漢之際為匈奴所敗、分保鮮卑山、因復以為号。……太康十年、又還于徒何之青山。元康四年、定都大棘城、所謂紫蒙之邑也。

とある。高辛氏すなわち帝嚳が海浜に遊び、その少子厭越を留めて北夷の君となり、その後、世々遼東に住んで東胡と号した。秦漢のとき匈奴に敗れて鮮卑山に逃れ、それによって鮮卑と号した。ここでは慕容氏の出自を帝嚳にもとめているが、その理由は、慕容儁が皇帝に即位したとき五行を木徳と定めたことと関係すると思われる。そのことについては後に取り上げることとし、ここでは帝嚳の子孫が東胡そして鮮卑となったことが主張されていることを確認しておく。

対して、魏収『魏書』巻九五、徒何慕容廆伝には、

徒何慕容廆、字弈洛瓌、其本出於昌黎。曾祖莫護跋、魏初率諸部落入居遼西、従司馬宣王討公孫淵、拝率義王、始建国於棘城之北。祖木延、従毋丘倹征高麗有功、加号左賢王。父渉帰、以勲進拝鮮卑単于、遷邑遼東。渉帰死、廆代領部落。以遼東僻遠、徙於徒何之青山。

とあり、慕容氏の出自に関して、慕容廆が昌黎から興ったことから書き始めており、帝王との繋がりを一切示していない。さらに徒何の慕容廆

としているが、徒何とは地名であって鮮卑であることも示していない。これは明らかに慕容氏が帝王に繋がること、東胡・鮮卑に繋がることを否定する北魏の認識が反映されている。[29]

ところが『晋書』巻一〇八、慕容廆載記では、

慕容廆字弈洛瓌、昌黎棘城鮮卑人也。其先有熊氏之苗裔、世居北夷、邑于紫蒙之野、号曰東胡。其後与匈奴並盛、控弦之士二十余万、風俗官号与匈奴略同。秦漢之際為匈奴所敗、分保鮮卑山、因以為号。……太康十年、廆又遷于徒河之青山。廆以大棘城即帝顓頊之墟也、元康四年乃移居之。教以農桑、法制同于上国。

とあり、慕容廆が昌黎棘城の鮮卑人で、先祖は有熊氏の苗裔、すなわち黄帝の子孫としている。黄帝の子孫が北夷に住んで東胡と号し、そのうち匈奴と並んで強勢となったが、匈奴に敗れて鮮卑山を保ったことから鮮卑と号したとあり、『晋書』では序紀とおなじく黄帝苗裔説に基づく中華の正統性と東胡・鮮卑に基づく北族の正統性が示されている。くわえて慕容廆が拠った大棘城は顓頊の旧墟であるなど、さらなる正統性の強化が行われている。

ここで考えるべきは、『晋書』の「有熊氏之苗裔」認識がいつのものかである。唐代で編纂された『元和姓纂』では慕容氏は高辛氏（帝嚳）の子孫とされており、また唐代の慕容氏の墓誌にも「其先昌黎棘城人」とあり、前燕皇帝の子孫という記述はあるが、古帝王に関する記述はない。[30] よって『晋書』の「有熊氏之苗裔」は唐代での認識ではない。また『十六国春秋』と『魏書』にも見えないことから、『晋書』の認識は慕容燕で編纂された歴史書、例えば范亨『燕書』などを参照したと思われる。『隋書』経籍志によると、范亨『燕書』二十巻は慕容儁の事を記すとある。慕容儁は三五二年、皇帝に即位して五行を定めるとき、晋の金徳を受けて水徳とすべしとする群臣に対し、後趙の水徳を受けて木徳とすべきとする韓恒の説に従っている。また息子の慕容暐のときにも郭欽が上奏し、やはり後趙の水徳を受けて木徳とすることが再確認されたが、[31] 前漢末の劉向・劉歆以降の五徳暦運説では黄帝（土）→少昊（金）→顓頊（水）→帝嚳（木）→堯（火）→舜（土）→夏（金）→殷（水）→周（木）→漢（火）と説明され、高辛氏（帝嚳）は木徳とされている。[32] よって慕容儁が皇帝に即位して五行を木徳と定め、このとき木徳の高辛氏（帝嚳）を始祖とする説が採用されたと思われる。ただし五行と始祖が一致しないケースもある。例えば北魏は孝文帝のときに水徳に改めたが、始祖は黄帝のままで変更はされていない。従って、必ずしも木徳と定めたから始祖を高辛氏としたとも言い切れない。かりに慕容儁の時には木徳と定めたが、始祖は黄帝のままであったとすると、『十六国春秋』の高辛氏（帝嚳）は北魏になってから改められたものと考えられる。その場合、北魏の黄帝苗裔説と抵触するのを憚って改めたと思われるが、変更が崔鴻によるものか、あるいは北魏に仕えて『燕書』を書いた封懿なのかはわからない。

いずれにせよ『晋書』の「有熊氏之苗裔」は少なくとも慕容儁の皇帝即位以前の歴史認識であったと思われる。范亨『燕書』に「有熊氏之苗裔」とあったかは不明であるが、もともと慕容氏が「有熊氏之苗裔」を保有していたのであれば、北魏に仕えた旧後燕の漢人もそのことを知っていてもおかしくない。

以上の推論に誤りがなければ、慕容部も黄帝後裔説・東胡・鮮卑山という一連の説話をもっていたことになり、その慕容部の歴史認識を道武

帝は旧後燕系漢人から入手したと考えられる。それが序紀の拓跋部の歴史認識に影響を与えたと考えられよう。さらに言うならば、慕容部の歴史認識を拓跋部のものとしてすり替え、それによって北族における拓跋部の正統性を高めようとしたのではないか。但し、拓跋部が桓帝の頃にすでに黄帝苗裔説を有していたとすれば、道武帝のときに慕容部の黄帝苗裔説を奪ったことにはならず、拓跋部も慕容部もいずれも黄帝苗裔説を早い段階で持っていたことになるが、いずれにせよ序紀と『晋書』慕容廆載記の類似性は注意すべきである。

また道武帝即位の祝文に「劉顕を殪し、衛辰を屠り、慕容を平らげ、中夏を定む」とあり、匈奴の独孤部劉顕と鉄弗部劉衛辰、鮮卑の慕容部を平定して中夏を定めたことが皇帝即位の理由にあげられているが、同じ鮮卑を自認する拓跋部にとって、鮮卑の正統に連なる慕容部は貶めたい相手であったに違いないことは『魏書』徒何慕容廆伝の記述方法からも明らかである。序紀において鮮卑山を大鮮卑山としたところにも拓跋部の優位性を示そうとする姿勢が見える。[33]

くわえて慕容燕の興起に関する讖言が北魏になって拓跋部の興起に関する讖言へと改編されたことを羅新が指摘している。[34] 例えば、慕容廆の興起に関連する讖言として黄泓が「真人出東北」を持ち出している。[35] それが北魏になると道武帝の興起を予言するものとして「慕容氏太史丞王先曰、当有真人起於燕代之間、大兵鏘鏘、其鋒不可当」[36]となる。もともと東北に真人が出現するという讖言を、北魏の拠点である燕代の間に変更したと羅新はいう。後燕の太史丞の発言とされているところに、慕容氏にかわって拓跋氏が興起する讖言であることがより強調されていると筆者は感じる。このことからも道武帝期に慕容氏の正統性を否定し、みずからの正統性を高めようとしたことがうかがえる。

第三章　烏洛侯国の遣使

本章では拓跋部の原住地に関する史料である烏洛侯国伝と礼志の記事について検討する。

まず烏洛侯国伝について、『魏書』巻一〇〇、烏洛侯国伝に、

烏洛侯国、在地豆于之北、去代都四千五百余里。其土下湿、多霧気而寒、民冬則穿地為室、夏則随原阜畜牧。……世祖真君四年来朝、称其国西北有国家先帝旧墟、石室南北九十歩、東西四十歩、高七十尺、室有神霊、民多祈請。世祖遣中書侍郎李敞告祭焉、刊祝文於室之壁而還。

とある。烏洛侯国は地豆于の北に位置し、代都（平城）から四千五百里余り離れている。太武帝の太平真君四年（四四三）に来朝し、烏洛侯国の西北に国家先帝の旧墟、南北九十歩（一三五メートル）[37]、東西四十歩（六〇メートル）、高さ七十尺（一七・五メートル）の石室があり、石室には神霊が宿り、民が多く祈請していると報告した。このことを聞いた太武帝は中書侍郎の李敞を現地に派遣し、告祭したのち祝文を壁に刻ませた。その祝文は『魏書』礼志に収録されているが、一九八〇年に米文平より嘎仙洞内で発見された碑文が礼志のもととなったオリジナルの碑文であることが確認された。

嘎仙洞碑文と『魏書』礼志の祝文を比較した結果、『魏書』礼志の祝文は、嘎仙洞碑文をもとにしつつ幾つもの改編がなされていることが確認された。[38] なかでも礼志が「子子孫孫、福禄永延」で終わっているのに

対し、嘎仙洞碑文ではそれに続けて「薦于皇皇帝天、皇皇后土、以皇祖先可寒配、皇妣先可敦配、尚饗」とある。太武帝が天地の神とともに皇祖・皇妣を可寒・可敦として祀ったという内容であるが、可寒（可汗）・可敦は遊牧国家における君主とその后妃の称号である。一方、皇祖・皇妣は遠祖或いは祖父母を指すことから、拓跋氏の遠祖または北魏初代道武帝・宣穆皇后[39]を先の可寒・可敦としていることがわかるが、より重要なことは、太武帝が可寒・可敦の子孫であるという点にあり、嘎仙洞碑文では黄帝に言及せず、かえって可寒・可敦の如き北族的表記のみ行っているとする内田の指摘[40]を踏まえると北族に対するメッセージと読める。なお町田は鮮卑拓跋部における可汗号は、拓跋部内での部族長に対する尊称からはじまり、拓跋部の勢力拡大にともなって対外的・対内的にも最高君主を意味する称号に変化したとする。すなわち道武帝の皇帝即位と同時に遊牧君主の称号としての可汗号も成立しており、柔然の社崙に先行する[41]。従って、碑文に可汗号を持ち出したことは、遊牧君主として北方世界に君臨する意思の表れと見ることができる。

もう一つ注意すべき改編として、礼志では「稽首来王、具知旧廟、弗毀弗亡」とある部分が嘎仙洞碑文では「稽首来王、始聞旧墟、爰在彼方」となっている。礼志では「旧廟がまだあることを具に知った」とする一方、嘎仙洞碑文では「旧墟が彼方にあることを始めて聞いた」とあり、太武帝は烏洛侯国の使者から石室のことを始めて聞いたとする。この点を踏まえて『魏書』礼志の記事を読むと、

魏先之居幽都也、鑿石為祖宗之廟於烏洛侯国西北。自後南遷、其地隔遠。真君中、烏洛侯国遣使朝献、云石廟如故、民常祈請、有神験焉。其歳、遣中書侍郎李敞詣石室、告祭天地、以皇祖皇妣配。祝曰……具知旧廟弗毀弗亡。……敞等既祭、斬樺木立之、以置牲体而還。後所立樺木生長成林、其民益神奉之。咸謂魏国感霊祇之応也。石室南距代京可四千余里。

とあり、礼志では、拓跋部が北方にいたときに祖宗の廟を烏洛侯国の西北につくったが、のちに南遷して遠く離れてしまった。真君中に烏洛侯国の使者が来て石廟がもとのまま存在するというので中書侍郎の李敞を派遣したとし、拓跋部の祖先があらかじめ石廟を造っていたとしている。

また礼志では祖宗の廟としているが、嘎仙洞碑文では旧墟となっている。烏洛侯国伝も石室と表記し、廟とはしていない。嘎仙洞は自然洞窟であって石をうがって廟を造ったというのはおかしい。礼志は太武帝が祖先を祀ったことを踏まえて祖先の廟とし、さらに序紀の記述と符合させるために北方にいたときに石をうがって築いたとしたのである。

さて烏洛侯国の使者によって太武帝が石室の存在を知り、李敞を派遣して祖先を祀り、祝文を刻ませたわけだが、烏洛侯国は石室が拓跋部の祖先の旧墟であることをどのようにして知ったのか。序紀に拠れば拓跋部が烏洛侯国の西北すなわち大鮮卑山に住んでいたのは黄帝の孫の時代から前漢末に宣帝が大沢に移動する期間で、烏洛侯国の遣使の四〇〇年以上前のことである。序紀には拓跋部には文字はないとあり、嘎仙洞にも真君四年の碑文以外の文字は見つかっていない。そのような状況で烏洛侯国が嘎仙洞を拓跋部の旧墟であると判断した根拠は何か。拓跋部の旧墟とする確証はなかったと考えるのが自然であろう。しかしより重要なことは、烏洛侯国が嘎仙洞を拓跋部の旧墟であると報告し、それを太武帝が認めたことである。なぜ太武帝は烏洛侯国の報告を信じたのか。

そして烏洛侯国はなぜこのような報告をしたのかを考える必要がある。

烏洛侯国の遣使は太平真君四年（四四三）三月のことであるが、この遣使の前後の状況について確認しておこう。烏洛侯国は契丹・庫莫奚などと同じく『魏書』巻一〇〇に収録された中国の東北地方に居住した民族で、「東北の群狄」と称された。契丹と庫莫奚は道武帝の登国年間に征討を受けたが、その後、北魏に遣使朝貢して名馬・文皮を貢いでいる。一方、もっとも遠隔地に住む烏洛侯国は、真君四年に来朝したことが『魏書』に記されるだけである。北魏にとって烏洛侯国は真君四年に来朝しなければ存在すら知らなかった民族であった。

北魏にとって北方地域最大のライバルは柔然である。五世紀初、社崙が丘豆伐可汗と号し、西は焉耆、東は朝鮮、北は瀚海、南は大磧におよぶ領域を支配した。そのため小国はみなその侵入掠奪に苦しみ、柔然に臣従するほかなかった。北魏の太武帝が即位した頃、柔然では大檀が立って牟汗紇升蓋可汗と号した。大檀と太武帝は長年にわたって戦闘を繰り返したが、神䴥二年（四二九）、太武帝の征討を受けた大檀は部族を率いて西へ逃走した。そこで大檀の大捜索が東は瀚海、西は張掖、北は燕然山におよぶ東西五千里、南北三千里の範囲で行われた。大檀は捕縛できなかったものの高車諸部族三〇万が北魏に降った。さらに巳尼陂にいる高車数十万を得た。ついで大檀は病死し、息子の呉提が即位し敕連可汗と号した。呉提は神䴥四年（四三一）に遣使朝貢し、延和三年（四三四）には婚姻関係を結ぶに至った。しかし太延二年（四三六）呉提が和親を破って侵入すると、これ以降、両者の戦闘が太延四年（四三八）、五年（四三九）、太平真君四年（四四三）、五年（四四四）と行われた。

加えて、四三二年以降、北魏が連年にわたって北燕を攻撃し、四三六年の大攻勢によって馮弘が高句麗に亡命した。この北燕の滅亡によって東北地域の政治情勢が変化し、北燕に服属或いは抑圧されていた東北地域の各部族が北魏と交流を持つようになった。そのことが烏洛侯国の使者の派遣につながったと羅新は指摘している。[42]

以上、烏洛侯国遣使の前後の状況として、太武帝による柔然と北燕の征討が繰り返し行われていたことが確認できた。こうした北方世界における北魏の進出は烏洛侯国の遣使と関連すると考えて大過ないであろう。また嘎仙洞碑文において可寒・可敦を記したことは、柔然との対抗上必要であったと町田も指摘している。[43]

さらにこの時期の出来事として注目すべきは、太武帝が神䴥二年（四二九）と太延五年（四三九）の二回にわたって国書編纂を行っていることである。国書編纂の目的について、『魏書』巻三五、崔浩伝に、

昔皇祚之興、世隆北土、積德累仁、多歴年載、沢流蒼生、義聞四海。我太祖道武皇帝、協順天人、以征不服、応期撥乱、奄有区夏。太宗承統、光隆前緒、釐正刑典、大業惟新。然荒域之外、猶未賓服。此祖宗之遺志、而貽功於後也。朕以眇身、獲奉宗廟、戦戦兢兢、如臨淵海、懼不能負荷至重、継名丕烈。故即位之初、不遑寧処、揚威朔裔、掃定赫連。逮於神䴥、始命史職注集前功、以成一代之典。自爾已来、戎旗仍挙、秦隴克定、徐兗無塵、平逋寇於龍川、討孽豎於涼域。豈朕一人獲済於此、頼宗廟之霊、群公卿士宣力之効也。而史闕其職、篇籍不著、毎懼斯事之墜焉。公德冠朝列、言為世範、小大之任、望君存之。命公留台、綜理史務、述成此書、務従実録。浩於是監秘書事、以中書侍郎高允、散騎侍郎張偉参著作、続成

前紀。至於損益褒貶、折中潤色、浩所総焉。

とあり、神麚二年（四二九）に行われた第一回国書編纂は、道武帝と明元帝が成し遂げられなかった荒域外の未だ賓服せざる勢力の平定、すなわち北方の柔然と赫連夏の征討を記すことであったと考えられる。[44] 一方、太延五年（四三九）の第二回国書編纂は、神麚二年以降に行われた華北統一の偉業を後世に残すことであり、この国書は太平真君十年（四四九）頃完成した。烏洛侯国の遣使は第二回国書編纂の時期にあたる。

なぜ太武帝は烏洛侯国の報告を信じたのか。すでに羅新が看破したように、北方世界に対して、鮮卑の正統性を高めるための確たる証拠として有用だったからである。柔然と覇を争っていた太武帝にとって、烏洛侯国の西北に拓跋部の先帝の旧墟があるという情報は、拓跋部がもとから大興安嶺北部にいたことを裏付けるものとなる。[45] 大興安嶺北部とは序紀にいう大鮮卑山であり、拓跋部が鮮卑の正統な後裔であることを証明する。太武帝が李敞に刻ませた碑文には、拓跋部の先祖が可寒（可汗）・可敦であったことが記されていたが、それを記した目的は柔然可汗に対する拓跋可汗の正統性を示すことにあった。

また『魏書』において柔然が東胡の末裔とされていることも関係している。鮮卑はもと東胡であり、拓跋部と柔然のルーツが同じとされている。そのなかでどちらが北方世界の正統な支配者であるのかを争っていたのである。『魏書』礼志に、祭祀のあと樺木を斬って立てたところ、のちに成長して林となり、地元民が「魏国感霊祇之応」であると思って益々神奉したという記述は、北魏が神霊から祝福された存在であり、北方世界の民にも認められたことを表現している。

一方、烏洛侯国はなぜこのような報告をしたのか。北方世界の二大勢力である北魏と柔然のいずれに従うべきか迷った小国の烏洛侯国が北魏に取り入ろうとして朝貢し、太武帝を喜ばせる報告をしたという理由が想定されるが、その後の烏洛侯国の動向をみると北魏に朝貢することはなく、また柔然の支配下に入った様子もない。烏洛侯国の遣使朝貢が真君四年の一度限りということ、北魏にとって遠隔の民族で未知の存在であったことを考えれば、そもそもこの報告は烏洛侯国から持ち出したものなのであろうか。ここからは推論に過ぎないが、太武帝は拓跋部が大鮮卑山から出たということを証明するために烏洛侯国の使者を仕立てて国家先帝の旧墟があると報告させたのではなかろうか。真相は不明ながら烏洛侯国の報告は太武帝にとって有用なものであったことは確かである。

おわりに

拓跋部の原住地および南下に関する史料（序紀・烏洛侯国伝・礼志）の内容とそれぞれの史料の書かれた目的・背景を考察してきた。序紀は、神元帝の誕生説話の前後で分けることができる。前半は、黄帝の子孫が北方の大鮮卑山に居住し、そこから大沢、匈奴の故地と南下した歴史を描くが、これは道武帝が皇帝に即位した天興元年（三九八）、拓跋部が黄帝の子孫であるという中華の正統性と大鮮卑山に居住したという鮮卑の正統性を引き継いでいることを示すために創作された鄧淵『代記』の歴史認識に基づいている。一方、後半は「真人代歌」に歌われた「祖宗開基所由」である神元帝の誕生説話からはじまり、神元帝による部族国家の建設とその後の拓跋部の発展の歴史が「君臣興廃之跡」とし

て描かれる。これら『代記』と「真人代歌」を史料源として序紀は書かれた。

烏洛侯国伝の内容は、太武帝期の柔然・北燕との覇権争いのなかで、拓跋部が大鮮卑山に住んでいたという序紀の記述（そのもとは『代記』）を裏付けるものとして、国家先帝の旧墟が烏洛侯国の西北にあるとする烏洛侯国の報告を太武帝が利用したことを意味する。また嘎仙洞碑文は柔然との北方世界での覇権争いのなかで、拓跋部の祖先が可汗・可敦であることを示すために刻まれたものである。

礼志の内容は、太武帝が国家先帝の旧墟の石室において、祖先祭祀を行ったことを記録するため、石室をあたかも拓跋部が北方に住んでいたとき石をうがって築いた祖宗の廟であるとし、その後南遷したために遠隔となったと序紀の記述との整合性をはかる。

これまで拓跋部の原住地について、関連する『魏書』の記述を正しいものとし、さらに嘎仙洞碑文の発見も相まって、嘎仙洞のある大興安嶺北側（内蒙古自治区阿里河鎮）が拓跋部の原住地であるとされてきた。さらに序紀の南遷の話も史実として鮮卑の遺跡と合わせ、大興安嶺北側から呼倫湖をへて内蒙古南部の和林格爾に至る南遷路が設定された。しかし原住地および南下に関連する史料がいずれも後世の創作であって、史実を反映したものでないとなれば、考古学上の成果と合わせた拓跋の南遷路も再検討されなければならない。

すると拓跋部の原住地はどこか。またそもそも拓跋部は鮮卑なのかといった疑問もわいてくる。筆者は序紀の記述のすべてが創作であるとは考えていない。序紀には「真人代歌」という拓跋部の歴史伝承に基づく部分が存在する。それは始祖とされる神元帝以降の記述にあたる。従って拓跋部の原住地は神元帝が拠点を置いた長川から盛楽付近、すなわち内蒙古フフホト周辺であったと考えられる。[46] また拓跋部は鮮卑かという疑問に対しては、拓跋部が鮮卑を称した時点で鮮卑となったと考える。遊牧民族における集団の呼称の原理に従えば、そのように解釈するのが妥当であろう。[47] 拓跋部は三世紀中頃、始祖神元帝のもとで内蒙古南部に勢力を築き、その後、遼東方面の勢力である宇文部と慕容部と関係を深めた。[48] 宇文部と慕容部は檀石槐に服属した大人とされており、[49] こうした関係のなかで拓跋部も西部大人推演に仮託し、鮮卑であると称したのであろう。さらに慕容氏を打倒していく過程で、鮮卑の正統な後継者であることを殊更に強調し、北方世界における支配者の地位を確立していったのであり、『魏書』序紀・烏洛侯国伝・礼志にはそのような北魏の歴史認識が端的に示されている。

注

（1）白鳥庫吉「東胡民族考」一九一〇～一三年。のち『塞外民族史研究上』岩波書店、一九八六年所収。

（2）内田吟風「魏書序紀特に其世系記事に就て」一九三七年、「烏桓族に関する研究」一九四三年。のち『北アジア史研究　鮮卑柔然突厥篇』同朋舎、一九七五年所収。『騎馬民族史1　正史北狄伝』平凡社、一九七一年。

（3）馬長寿『烏桓与鮮卑』一九六二年、広西師範大学出版社。

（4）宿白「東北内蒙古地区的鮮卑遺跡――鮮卑遺跡輯録之一」『文物』一九七一年第五期。

（5）米文平「鮮卑石室的発現与初歩研究」一九八一年、のち『鮮卑史研究』中州古籍出版社、一九九四年所収。

（6）主な研究をあげると張博泉「嘎仙洞刻石与拓跋鮮卑史源的研究」『黒龍江民族叢刊』一九九三年第一期。康楽『従西郊到南郊――国家祭典与北魏政治』稲郷出版社、一九九五年。李志敏「嘎仙洞的発現与拓跋魏発祥地問

題」『中国史研究』二〇〇二年第一期。楊軍「拓跋鮮卑早期歴史辨誤」『史学集刊』二〇〇六年第四期。韓昇・蒙海亮「隋代鮮卑遺骨反映的拓跋部起源」『学術月刊』二〇一七年第一〇期。

(7) 羅新「民族起源的想像与再想像——以嘎仙洞的両次発現為中心」『文史』二〇一三年年第二期。

(8) 吉本道雅「魏書序紀考証」『史林』九三巻三号、二〇一〇年。

(9) 内田吟風「魏書序紀特に其世系記事に就て」、志田不動麿「代王世系批判」『史学雑誌』第四八編第二号・三号、一九三七年、田村實造「北魏開国伝説の背景」一九五四年、のち『中国史上の民族移動期』創文社、一九八五年所収。

(10) 羅新『中古北族名号研究』北京大学出版社、二〇〇九年。

(11) 園田俊介「北魏・東西魏における鮮卑拓跋氏（元氏）の祖先伝説とその形成」『史滴』二七号、二〇〇五年。園田は『晋書』を根拠に弱水を漠然と北方の河川と認識していたとするが、『三国志』夫余伝に従えば、弱水は夫余の北方を流れる河川であり、東胡が拠った鮮卑山付近の河川とするのに都合がいい。

(12) 吉本は神元帝の即位が庚子（二二〇年）であることを基準に一世代三〇年として計算している。

(13) 佐藤賢「鮮卑拓跋氏の南下伝説と神獣」『九州大学東洋史論集』三八、二〇一〇年。

(14) 田村實造『中国史上の民族移動期』創文社、一九八五年では「神獣とは遊牧民のトーテムとしてしばしば選ばれる馬・牛に擬したものと考えられ、のちのキタイ族の青牛白馬伝説などと軌を一にするものといえよう」（一八九～一九〇頁）と述べるが、牛については『魏書』礼志から土徳の獣を意味すると筆者は考える。

(15) 田村前掲書、一九二頁。

(16) ①巻一五、元崇伝「従征蠕蠕、別督諸軍出大沢、越涿邪山、威懾漠北」。②巻二七、穆崇伝「初、太祖避窟咄之難、遣崇還察人心。崇夜至民中、留馬与従者、乃微服入其営。会有火光、為舂妾所識、賊皆驚起。崇求従者不得、因匿於坑中、徐乃窃馬奔走。宿於大沢、有白狼向崇而号、崇乃覚悟、馳馬随狼而走。適去、賊党追者已至、遂得免難」③巻四〇、陸俟伝史臣曰「惜哉。叡、琇以沈雅顕達、而釁逆陥禍。深山大沢、実有龍蛇」。④巻九九、張玄靖伝「東苑大塚上忽有池水。城東大沢、地忽火燃、広数裏。乃殺宿嫌牛旋等以応水火之変」。⑤巻一〇二、粟特国伝「粟特国、在葱嶺之西、古之奄蔡、一名温那沙。居於大沢、在康居西北、去代一万六千里」。⑥巻一〇三、蠕蠕伝「四年、車駕幸五原、遂征之。楽平王丕、河東公賀多羅督十五将出東道、永昌王健、宜都王穆寿督十五将出西道、車駕出中道。至浚稽山、分中道復為二道、陳留王崇従大沢向涿邪山、車駕従浚稽北向天山」。⑦巻一〇三、蠕蠕伝「醜奴母子欣悦、後歳仲秋、在大沢中施帳屋、斎潔七日、祈請天上」。このうち①⑥は同一の場所を指すが、②⑦場所不明、③抽象的表現、④姑臧城の東、⑤アラル海。

(17) 真人代歌については、渡辺信一郎『中国古代の楽制と国家——日本雅楽の源流』文理閣、二〇一三年は、北魏創世物語、君臣興廃の歴史を鮮卑語で歌ったものであるとする。

(18) 田余慶『拓跋史探』修訂本、生活・読書・新知三聯書店、二〇一一年。

(19) 『魏書』巻二、太祖紀、天興元年十二月条。

(20) 田余慶、前掲書二一四頁。佐川英治「東魏北斉革命と『魏書』の編纂」『東洋史研究』六四の一、二〇〇五年。

(21) 田余慶、前掲書二一二頁。

(22) 『魏書』巻三二、崔逞伝。

(23) 『資治通鑑』巻一一一、晋紀三三、安帝隆安三年条。

(24) 『魏書』巻三二、封懿伝。

(25) 『魏書』巻二四、崔玄伯伝。

(26) 『魏書』巻二四、鄧淵伝。

(27) 内田、前掲論文。

(28) 吉本、前掲論文。

(29) 羅新前掲論文は『魏書』が宇文部を匈奴とし、鮮卑の段部と慕容部を徒何と称しているのは、それらが鮮卑と称する栄誉を剥奪する北魏の政策であるとする。

(30) 『元和姓纂』巻八、慕容氏「高辛少子居東夷、後徙遼西、号鮮卑」。「慕容三蔵墓誌（咸亨〇七五）」「慕容知礼墓誌（咸亨〇七六）」「慕容知廉墓誌（聖暦〇三二）」以上、『唐代墓誌彙編』（上海古籍出版社、一九九二年）所

収。

(31) 『晋書』巻一一一、慕容暐載記。佐川英治「漢帝国以後の多元的世界」南川高志編『378年　失われた古代帝国の秩序』山川出版社、二〇一八年は後燕が木徳を称したのは、後趙の水徳を受け継ぐとともに、慕容氏が興った東方の地を意味し、中原王朝としての正統と東方の王国としての自己認識が二重に合わさったものであるとする。

(32) 安居香山『緯書』明徳出版社、一九六九年。

(33) 吉本前掲論文は大鮮卑山とする意図を拓跋に先行する鮮卑諸部なかでも慕容部との差異化を図ったものとするが首肯すべき見解である。

(34) 羅新前掲論文。

(35) 『晋書』巻九五、黄泓伝。

(36) 『魏書』巻一〇五の三、天象志三。この讖言について田余慶前掲書も道武帝の周囲の人々によって作り上げられたデマであったことは明らかであると指摘している。

(37) 一歩六尺（一五〇センチ）、一尺約二五センチとして計算。

(38) 町田隆吉「北魏太平真君四年拓跋燾石刻祝文をめぐって」『アジア諸民族における社会と文化』国書刊行会、一九八四年。

(39) 道武帝の皇后は慕容氏であるが、明元帝の生母である劉氏が子貴母死制で死を賜ったのち明元帝が即位したことで皇后に追尊された。この祝文は太武帝が自らの血統に繋がる人たちを祀ったものであるから慕容皇后ではなく宣穆皇后が祀られたと思われる。

(40) 内田吟風「北魏大邢城南碑文考」『龍谷史壇』一〇〇号、一九九二年。

(41) 町田前掲論文。

(42) 羅新前掲論文。

(43) 町田前掲論文。

(44) 拙稿「北魏崔浩国史事件――法制からの再検討」『東洋史研究』第六九巻第二号、二〇一〇年。

(45) 羅新前掲論文は烏洛侯国の報告は拓跋部の起源について強固な証拠を提供したと指摘している。

(46) 韓昇・蒙海亮前掲論文は、北魏皇族の末裔である隋の元威の父系遺伝子を調べ、それがモンゴル東部のザバイカリエに高頻度に分布することから、拓跋部はザバイカリエ地区から呼倫湖に移動したと結論づけ、嘎仙洞を拓跋部発祥地とする従来説に異を唱える。拓跋部の発祥地については、これまでの文献史学と考古学にくわえて、遺骨の形質を分析する形質人類学の手法、さらには遺骨の遺伝類型型の分析から迫る分子人類学の手法が取り入れられるようになってきた。韓昇・蒙海亮前掲論文もそうした新たな研究分野の成果であるが、遺伝類型の分布から元威と同じ遺伝類型の分布状況はわかるが、拓跋部という集団の形成とどのように繋がるのかが不明である。ザバイカリエに居住していた時期に拓跋部と称していたとは思われない。文献からは拓跋部が集団を形成したのは三世紀頃であって、拓跋部という集団の形成期の居住地を発祥地とすれば内蒙古南部となろう。一方、拓跋部を構成する人々がどこからきたのかということで言えば、少なくとも元威の先祖はザバイカリエ地方にいたということになるが、拓跋部には様々な部族集団が参加しており、それからすべて同じ場所から移動してきたとは考えられない。

(47) 『三国志』巻三〇、鮮卑伝の注に引く王沈『魏書』に「匈奴及北単于遁逃後、余種十余万落、詣遼東雑処、皆自号鮮卑兵」とあるように、遊牧民族は大きな集団に属するとその集団の名称を自ら称する。

(48) 『魏書』官氏志に「東方宇文・慕容氏、即宣帝時東部、此二部最為強盛、別自有伝」とあるが、拓跋部が宇文・慕容と関係を持ったのは神元帝以降のことである。

(49) 姚薇元『北朝胡姓考』修訂本、中華書局、二〇〇七年、一八二頁。